

【報告】

ベトナム特別支援学校訪問記

A Visit to a Special-Needs School in Vietnam

水野 恵理子 (Eriko Mizuno)

I はじめに

2017年3月、ベトナムのホーチミン市師範大学にて第2回音楽療法講座を行いました。テーマは「自閉症児を対象とした音楽療法」で、2日間にわたり合計6時間の講座です。ここではその講座については触れませんが、翌日の特別支援学校見学について報告いたします。

講座終了後大学側が作成した「修了証」を受講された皆さんにお渡ししていると、特別支援教育課のミー先生が「明日特別支援学校に来て下さいますね。」と確認にみえました。特別支援学校見学についてはメールで約束していたので承知している旨お答えしたのですが、詳細を聞いて驚きました。

「朝7:30にホテルに迎えに行きます。9:00から30分くらい学校を見学していただいて、そのあとお昼まで教員たちに音楽療法の講習をお願いします。今日教えていただいたのと同じようなことでいいのです。できましたら午後から子どもたちに音楽療法をしていただけると嬉しいです」

見に来てくださいとは言われていましたが、講習なんて一言も聞いていませんでした。講座を終えてのんびり旅行気分で見学させて頂くつもりでしたが。想定外の展開になるのがベトナムではよくある話で、こちらは慌てていても先生方はゆったりニコニコしておられます。しかしさすがに35℃前後の暑さの中（まずエアコ

ンは無い）、まる一日は老体が持たないのでなんとか午前中だけにしてもらうことにしました。しかも頼みの綱である通訳のガーさんは今晚仕事で日本へ発つとのこと。「心配しないでください。通訳はさがします」と言われても、大いに心配です。

翌朝6:00からしっかり腹ごしらえをして、7:20にフロントに下りるとミー先生と通訳の女性がもう待っておられて、挨拶もそこそこにすぐタクシーで出発しました。

ベトナムでは朝の活動開始がとても早いです。日本なら午前の活動は早くても9:00頃、大学の始業時刻もだいたいそれくらいですが、ベトナムでは朝7:30から授業が始まります。にもかかわらず夕方終わるのは17:00頃だし、夜は夜であることがあるようなので睡眠時間を削っているのでしょうか。にもかかわらず授業中に居眠りする人などまず見かけません。むしろ目が輝いていて、活発です。これだけを見ても、日本の大学生とはずいぶん違っているのがわかります。

さて、朝はすごい渋滞が普通で、車とバイクの群れとブーブービービーけたたましい警笛で道路はカオス状態になるのですが今朝は少しマシなようです。比較的スムーズに中心街から抜け出て郊外向けて走ります。ほとんどバラックと言っているような小さな個人商店が軒を連ねているかと思うと真新しい大きなビル

が出現。「こどもの病院です」しばらく行くと「これはイオンです」AEONの勢いはすごいです。ベトナムの人家もまばらな田舎町にイオンモール？そのギャップに違和感を覚えます。

II Binh An 特別支援学校



Binh An 特別支援学校の正門

目指す Binh An 特別支援学校は、別荘地の開発が進んでいる小綺麗な地域の一角にありました。敷地は500坪くらいでしょうか。鉄筋コンクリートと思しき2階建ての校舎と、プール、遊具のある庭を隔てて小さい建物があります。この建物では年長の生徒が作業をしたり、時々カフェを開いたりするのだそうです。

社会主義国ベトナムでは99%以上教育機関は公立でそのカリキュラムは国に管理される仕組みですが、民間からの寄付によって、例えば大学の教員などが副業として教育サービスを行う民間センターがあるようです¹⁾。この Binh An 特別支援学校もそうではないではないかと思われま

す。ここに通っているのはいわゆる発達障害、主に自閉症スペクトラムの子どもたちがほとんどで、7,8人のクラスを担当の先生が一人で見えています。特別支援学校というと必ず見かけるダウン症の子どもが一人もいなかったのが訊ねてみると、ダウン症児は別の学校に行っているとのことでした。教室はほとんどがとても狭

く、走り回るスペースはありません。発達障害の子どもたちにとっては息苦しく感じるかも、と思いましたが、皆比較のおとなしく制作や勉強に取り組んでいます。



3歳児のクラスはお絵かき

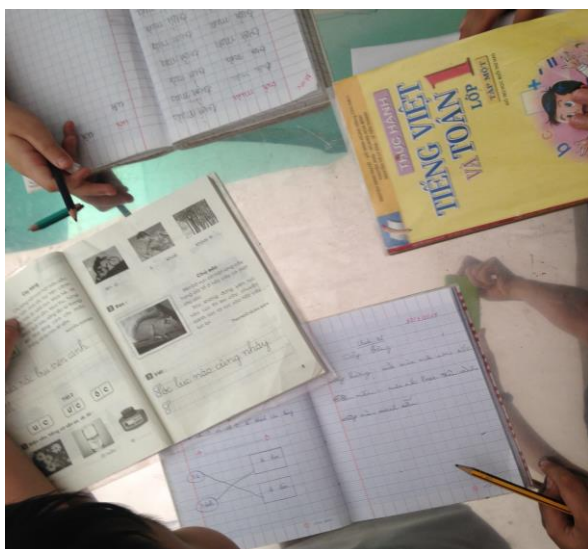
一つのクラスの中に入って見せていただきながら、見慣れない外国人の私に興味を示してくれる子どもにハイタッチしようとしたら、腕を体の前で組んで手を隠します。あ、そうそう、ベトナムの子どもは目上の人の前ではこのポーズでおじぎをするのでした。「私はあなたに危害を加えません」という恭順のポーズなのです。日本のようにいきなりハイタッチや「あくしゅでこんにちは」というわけにはいきません。



目上の人には腕を組んでごあいさつ

通っている子どもたちの年齢は2歳からで、2

～3歳は遊んだり先生のキーボード伴奏で歌ったりしていましたが、驚いたのは4歳以上になると、文字を書いたり、計算をしたり「勉強」をしていることです。なんと2桁の足し算、引き算をしている子どももいます。「できる子だけですよ」とのことでしたが、皆お行儀よく机の前に座って作業しているのです。しかも、日本なら幼児用の教材という文字が大きくったり可愛いイラストがあったり、カラフルな絵本のような体裁になっていることが多いのですが、白黒で文字も小さく小学校高学年の教科書という感じがします。ノートも細かい升目に数字や文字をきっちり書いていますが、ベトナム語が読めない私には内容まではわからないのが残念です。



テキストで勉強する子どもたち

教室にあるのは文字や数字の勉強のためのいわゆる知育教材が主で、日本では必須の絵本がほとんどないことに気がきます。大久保、余公ら（2018）によるとベトナムでは「絵本の読み聞かせ」は幼児教育の指導計画に位置付けられていないとのこと²⁾。これは2018年ミャンマーの幼稚園を訪問した時にも感じました。本は勉強のためのもの、ということでしょうか。

また運動するようなグラウンドもなく、校舎の陰の狭いスペースで体操しているのが見えました。



体操する子どもたち

ところで、4歳児のクラスにも、5歳児のクラスにもベビーカーに乗せられた赤ちゃんやよちよち歩きの赤ちゃんが混じっています。訊いてみると、担任の先生の子どものこと。子連れで仕事をしているのです。子どもたちにとっては癒しになっていいかもしれません。赤ちゃんがおりこうにしていれば、ですが。

III 音楽療法ワークショップ



スパークオーガンジーで深呼吸

見学を終えると、まるで野外の休憩所のような壁のないスペースで、15名ばかりの先生方に音楽療法のワークショップを行いました。学生さんのような若くて澁刺とした先生方ばかりです。3mほどのスパークオーガンジーを使って呼吸法、ペアで両端をもって布を上下させな

がら発音し、歌をうたいます。そして音楽に合わせて身体表現をしたり、楽器でリズムをとったりします。今回の講座では布やタンバリン、カスタネット、鈴などの楽器は全て日本から持参しました。というのは大学で1回目の講座の時、苦い経験があったからです。

少し音楽教育のことに触れたいと思います。まず、教育（師範）大学というところの国でもピアノなどあって当たり前という認識は捨てなければなりません。国立の教育機関であるホーチミン市師範大学でさえ電子ピアノ一つ借りるのにもあちこち探してもらってやっと調達、という感じでした。また事前にタンバリンやカスタネット、鈴などの写真も添付して「このような楽器はありますか」と訊ねたところ「準備しておきます」とのことだったのですが行ってみると予想外のものが用意されており愕然としました。まずタンバリンは日本の百貨店で売られているよりちやちな代物。おもちゃの太鼓、カスタネットの代わりに粘土細工で使う竹べらのようなものや貝殻のようなものを打ち鳴らす（ほとんど鳴りませんが）、といったように、日本の幼稚園・小学校の備品を知っている者にとってはカルチャーショックです。ホーチミン市内の幼稚園を見学した時もやはりそのような楽器を使っていたので、それが普通なのかもしれません。



ホーチミン市内の幼稚園での合奏

ちなみに、ベトナムでは小・中学校の音楽の授業に器楽教育はありません。一方台湾やタイ、マレーシアでは小学校でリコーダーを習うとのことなので（田中ら、2002）、戦争やドイモイ（刷新）政策などで教育カリキュラム整備が後回しになっているのかもしれませんが³⁾。小学生の子どもを持つ人が「日本ではリコーダーや鍵盤ハーモニカを学校で習うのでしょうか。」と羨ましがっていました。もっとも2017年にヤマハとベトナム教育訓練省との間で器楽教育導入・定着化を図ることが決定し、覚書が締結されたようなので、リコーダーや鍵盤ハーモニカが導入されるのも時間の問題でしょう。ただ、有識者からは教える内容が西洋音楽に偏りすぎるのではないかと、という批判もあるようです。

何はともあれ教員養成機関での教育が第一です。個人的に習っていたり、音楽学校に通っていたりする人は別として、幼稚園・小学校の先生で実際ピアノを弾ける人はほとんどいないとのこと。カリキュラムには一応ピアノも入っているものの年間数時間しか授業がないのですから無理ありません。幼稚園では伴奏なしで歌ったり、CDに合わせて歌ったりしていました。もっとも日本のように各教室にピアノや電子ピアノがあり、ほぼすべての先生が弾いて歌えるという方が特殊なのでしょうか。



用意されていた楽器たち

さて「実際に自閉症の子どもを連れてきていますか」というので自閉症の子どもを相手に音楽遊びを行ないました。自閉症スペクトラムの中でも多動傾向のある男の子で、スパーク布を身体にぐるぐる巻き付けたり、タンバリンをバンバン鳴らしたり大暴れ。しかしキーボードで弾く音楽には耳を傾け、トルコ行進曲などアップテンポの曲を弾くと、とても喜んでそれに合わせて走り回っています。彼の様子を見てももう少し身体を動かせるスペースがあった方がいいかもしれないと感じました。ちなみにベトナムでは音楽療法はまだほとんど知られていません。このように子どもの動きに合わせてピアノを弾いたり、リズムを合わせて寄り添うといったことさえ目新しいことなのです。このワークショップで先生方が今後音楽をもっと活用するきっかけを与えられたら幸いです。

最後にたまたま太鼓の話になり、ベトナムの太鼓ならありますよ、と大きな宮太鼓の形をした太鼓（でも皮は片面のみで、裏は張ってありません）と両端先細りした形のバチを持ってこられました。それで、ドドーンと一発叩いてみせると、「わー、すごい！」と大喝采。「音楽療法に太鼓も使えますか？」「木のバチは投げたりして危険なので、手で叩いてもいいですか？」と質問が続出。機会があれば和太鼓ワークショップもいいかもしれません。



特別支援学校の先生たちと

いま（2018年現在）ホーチミン中心部では日本との共同事業で地下鉄を建設中です。隣接地域では50階を超える高層マンションがニョキニョキ建っています。今後の経済的な発展が予想されます。でも教育も福祉もまだまだこれから。そして町で見られる人々の暮らしぶりもまだまだ豊かとはいえません。経済だけ、また一部の特権階級だけが突出したいびつな高度成長にならないようにと願うばかりです。（我が国も同じですが…）

引用文献

- 1) 白銀研五（2017）ベトナムにおける障害児のための民営教育・医療施設の展開，京都大学大学院教育学研究科紀要，63，pp. 529-541
- 2) 大久保淳子、余公裕次（2018）ベトナムの就学前教育と絵本の位置づけ，福岡県立大学人間社会学部紀要，26-2，pp. 119-127
- 3) 田中健次（2002）アジア諸国の音楽教育制度に関する研究，音楽教育学，32-3，pp. 23-35

参考文献

- 1) 柴山真琴（2008）幼児教育分野における途上国支援のための基礎研究，鎌倉女子大学紀要，15，pp. 1-12
- 2) 安藤博（2018）アジアの音楽教育事情とピアノ I ベトナム，ピティナ会員レポート
http://www.piano.or.jp/report/04ess/intl/2018/09/25_24768.html